

(VII)

さて全体の状態はどうなのか、中間報告をしよう。午前二時十五分だった—突然停電したのでテープレコーダー、電気の要る作品が駄目になった。原因は海岸に引いた赤外線の色が、満潮の波に洗われてショートしたからだ。酒は沢山あるのだが、九州派の呑み助が呑まないのでこたま余っている。だが酒に酔って彷徨していた連中も完全に黙殺されて、静かな殺意に頭の芯が冷えてしまった。酔もさめゲンナリになって、そんなお客様には寝込む者が多かった。腰をいれた木下だけが相変わらず呑んで頑張っていた。

その状況は、全体を底意地の悪いヒエビエとした悪意の中に誘い込み、明日と昨日が同等の比重で、塩水の中で競う時、明日という中身は一切抜き替えられて、乾いた事実とでも呼べばよいのか、或は虚無というにはミジメなお飾りの現実が判る夜明の冷たさ。とにかく、どうにもならない存在だけが、幸せな人々が睡魔に襲われると目醒め、ひとり冷たく活気づくのである。

常日頃、あれほど酒の好きな九州派の連中が、一人も酒を飲まなかったという事実、それはとりもなおさず酒より以上に面白い「ナニカ」があったということの証明以外の、なにもないのでないが、あまりの禁酒に他の人々は戸惑っていたようだ。